

中央大学学会白門化学クラブ支部

# 白門化学クラブ会報

第12号（平成28年度総会開催通知）



写真説明：4頁下をご覧ください。

平成28年8月8日発行  
中央大学学会白門化学クラブ支部  
〒112-8551  
東京都文京区春日 1-13-27  
中央大学理工学部応用化学科内  
白門化学クラブ事務局  
E-mail: hakumon-kagaku  
@gakuinkai.com  
URL: <http://www.gakuinkai.com/hakumon-kagaku/>

中央大学学員会白門化学クラブ支部  
平成 28 年度総会・講演会並びに懇親会  
開催のお知らせ

会員の皆様には、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今年も後楽園キャンパスにおいて支部総会を下記の通り開催いたします。

今年で白門化学クラブ創立40年になります。そこで今年の講演会の講師には中央大学名誉教授 関口 勲氏をお招きし、氏が生涯に渡り研究されて来られた造粒・粉体の世界の事や、趣味のガラス細工が芸術作品にまで到達した、最近のご活躍の様子をお聞きます。

今回も講演会と懇親会を計画しております。ご家族や会員以外の方もお誘いの上、多くの方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

記

1. 日時：平成 28 年 10 月 22 日（土） 13 時 30 分～17 時 30 分（予定）
2. 場所：中央大学後楽園キャンパス
  - ① 総会：13 時 30 分～14 時 00 分  
場所：\*号館 \*階 \*\*\*\*号室（確定後、ご連絡いたします。）
  - ② 講演会：14 時 00 分～15 時 00 分  
場所：同上  
テーマ：「造粒技術の確立と一般化、そしてガラスアートへの取り組み」  
講師：関口 勲 中央大学名誉教授（第 6 回昭和 33 年卒）

移動・会場設営準備

- ③ 懇親会：15 時 30 分～17 時 30 分  
場所：5 号館地下 1 階 学生食堂
3. 会費：会員並びに卒業生 7,000 円      ご家族（中学生以下無料）3,000 円  
会費は、当日申し受けます。
4. その他
  - ① 受付は、総会・講演会会場入り口で行います。
  - ② 懇親会での飲み物等ご寄贈を歓迎します。
  - ③ 同封した「出欠はがき」は 9 月 20 日までに必着でご返信願います。
  - ④ 当日連絡先：後日連絡します。

以上

白門化学クラブ支部の皆様へ

例年の 6 月の総会開催が時機を逸してしまい 10 月の開催となりましたことをお詫び申し上げます。会報もこの第 12 号が平成 28 年度の第一号です。

今年も今なお続く熊本地震はじめ地域限定型の天変地変が起きています。皆様には無事乗り切られてきましたでしょうか。

このところ、週間東洋経済臨時増刊「本当に強い大学 2016」(2016 年 5 月 16 日)はじめ多くの大学ランキング本が発行され、いろいろな角度から大学が評価されています。中央大学では昨年、新たな理事長、総長・学長の就任があり、策定された中長期事業計画「CHOUVISION2025」が昨年 11 月 9 日に発表されました。企業も株価に代表される評価のみならず、環境や CSR など新たな観点からの評価を受けています。ランキングに一喜一憂することなく、真に評価に耐える大学となっていくことを希望します。

新ビジョンでは、後楽園と多磨とを 2 大キャンパスと位置づけ、後楽園に新校舎を建設し(断定はしていないが)法学部を移転するとしています。旧後楽園校舎に学んだ者としては、体育の授業を受けたやっとなり野球ができる広さの運動場に、理工学部と合わせ約 1 万人が学ぶということを想像することが出来ません。

第 6 回昭和 33 年卒業生には、メッキ工業界で活躍された二人の先輩-島村周作さんと川上洋一さんがおられます。高度成長期の公害源の一つが小規模ながらメッキ工場でした。お二人は東京と埼玉でメッキ工場を経営し、化学の知識を生かし公害防止・環境改善と品質向上に取り組まれ、業界で指導的役割を果たされ、現在も業界の重鎮をとして活躍されていることは我々の誇りであります。

ちなみに、工業化学科同窓会第 6 代会長で応用化学科同窓会名誉会長である島村周作さんは、兼松精鍍工業(有)の経営に携わり、全国鍍金工業組合連合会、埼玉県鍍金工業組合で要職を歴任され、藍綬褒章、旭日双光章を受章されています。現在も、さいたま市環境審議会など市の環境関連団体で活躍されています。

川上洋一さんについては、本誌 12 頁の「先輩の工場を見学して」をご覧ください。

これからも会員の皆様の活躍ぶりを紹介させていただきます。

支部長 堀中 新一  
幹事長 近藤 明義

写真説明 (上) 各種クロメート処理例  
写真説明 (下) 亜鉛メッキ設備  
写真提供 (有) 東亜鍍金工場 提供

## 白門化学クラブ支部の設立の話

栗原 功 (第7回 昭和34年卒 平塚市在住)

白門化学クラブ支部は、当初『白門工業化学クラブ』(略称白門工化クラブ支部)として発足し、平成12年の第21回総会で名称を『白門化学クラブ』に変更しました。設立40周年を迎えるに当たり、設立当時の事を知っている関係者も年々少なくなって来ましたので、40年前の手帳を頼りに記憶を辿ってみました。

昭和50年当時 私は西武新宿線にあった田無市の工場(現在の西東京市)に勤務していましたが、2月上旬頃第1回生の中田さんから電話がありました。

『栗原 君か、俺 中田 中田 元気かい。実は相談したい事があるので、大学へ来てくれないか』

早速 中田先生の所にお伺いした所、化学工学実験室には第1回生の牧さん、他に数人の諸先輩・後輩の方々が集まっていました。

相談内容は、『新たに学会に入会する』話でした。

私も勉強不足で、大学に同窓会『学会』がある事を知りませんでした。『学会』の詳細については、第五回生で体育会・相撲部出身の小野田明生さんから説明があり、大変 歴史のある大きな組織の同窓会であることを知りました。

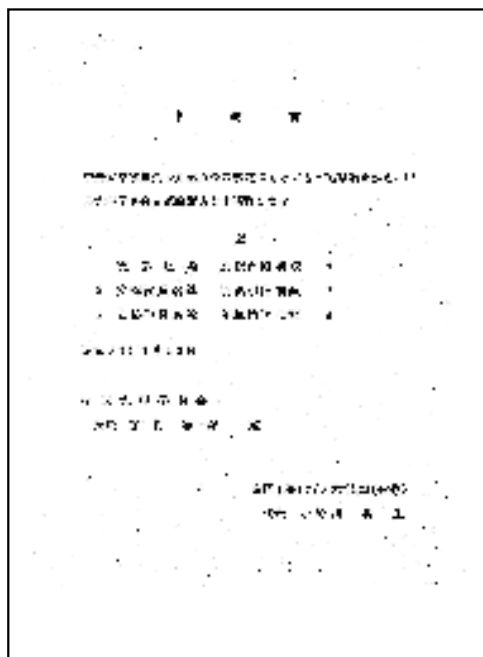
当時 工学部は4学科ありましたが、『学会』に入会している学科はありませんでした。出席者全員が入会に賛同したので、その後細部打ち合わせを10回位持ったと記憶します。既にある工業化学科の同窓会は会員数も増えて、会員相互の親睦がスムーズに進まなくなったのも、新たな同窓会設立の一因だったと思います。

設立の目的は、会員相互の親睦を計り、且つ他学会支部と連携を保ち、中央大学の興隆並びに白門工業化学クラブの発展に寄与する事でしたが、特に、当時 工業化学科出身の教授・助教授は居なかったので、早く出身者の中から教授・助教授が出るように、出来れば大学にも働きかけて、出身者をバックアップする事も隠れた設立の理由でした。

そこで、会員数は250人位の少人数に絞り、入会募集することになりました。

実際には、中田先生が中心になり幅広く声を掛けられたので、最終的には220人のご参加があり、中田先生が大変喜んでおられた事が昨日の事に思い出されます。

私も及ばずながら、同期の7回生(昭和34年卒)



に声を掛けた結果、22名の賛同を得ました。

昭和51年1月に『申請書』を学会に提出し入会を承認され、同年3月22日にはプレスクラブにて設立総会を開催し、現在に至っています。

『中田同好会』などと陰口を言われた事もありましたが、この度 白門化学クラブ支部が設立40周年を迎える事は、設立関係者として感無量であり、これからも益々 支部が発展する事を祈念しています。



中央大学学会創立100周年記念祝賀会（昭和63年（1988）11月20日）会場にて  
堂野会長、川添学長と共に白門化学クラブ支部出席者（敬称略（ ）内は卒業回数）

前列左から ●● 南方潤三(6) 栗原 功(7) 山口清助(2) 八田幹雄(7) ●●

後列左から 斉藤好雄(11) ●● 岡本義隆(5) 田中義暉(7) 小野田明生(5)

堂野会長 川添学長 中田常雄(1) 永井 仁(9) 牧 吉雄(1) ●● ●●

これに先立ち、第13回白門化学クラブ支部総会を、新御茶ノ水地下1階マクドナルドで開催した。

## 雑 感

江本房利 (第 8 回 昭和 35 年卒 さいたま市在住)

白門化学クラブ設立 40 周年おめでとうございます。

私が化学クラブにお世話になり始めたのは、第 24 回 (平成 15 年) からですが、会に参加させて頂くようになって強く感じられたのは、社会の各分野で活躍されている同窓生の状況が解り、感動と同時に中大工学部に誇りと自信を持つようになった事です。同時に自分がこれまで母校に対する関心が薄く積極的に関わりあっていなかった事の自省もしています。最近、堀中支部長や根津幹事が収集された、会員時報に寄稿された化学クラブに関する一連の記事を読ませて頂く機会に恵まれました。これら記事の中で、当クラブ発足当時から副支部長を務められた故小野田明夫先輩が昭和 58 年に寄稿された「海外で味わった母校」には大変な感銘を受けました。お隣の韓国にも中央大学の同窓会があり、その会のメンバーの方々が韓国の要職で活躍されておられる事が紹介されており、同窓生として大いに気を良くしました。このように、化学クラブに参加することで多くの感動を得ながら思うのは、なぜもっと早くから参加しなかったのだろうかと言う事です。顧みるに、学部卒業後 10 年以上は社会の中で自身の基盤を築くために懸命に働くことに捉われ、母校の出身者の方々の活躍に目を向ける精神的な余裕が無かったように思われます。ちなみに、我がクラスの初のクラス会が開かれたのは卒業後 23 年を経ていた事からしても、お互いに母校や同窓の仲間に向ける余裕が無かったのが実態のように思われます。さて、自身の当クラブへの参加が遅れたことと、クラブへの参加によって得られた貴重な知見と感動を踏まえ、これからの白門化学クラブに次のことを期待します。即ち当化学クラブが、現役で活躍中の若い卒業生の情報交換の場として、且つ又お互いの切磋琢磨の場に変身して欲しい事であります。そのためには、現役教官が卒業して行く学生達に向けて、社会に出たら斯様な場があるから是非顔出しをして先輩達と種々の情報交換の場として活用するように吹き込んで貰う。一方、当クラブ会員は訪ねて来る若い後輩たちを暖かく迎え、若手とOBを交えたディスカッションと適切な助言で対応するというフランクな場にすることに努める。



## 私の学生生活とその後

鳥居政雄（第11回 昭和38年卒 久喜市在住）

私は何の変哲もない者ですが、それだけに今の世の中を見るにつけ運のよさを感じます。今の世に生きたらとても生きていけないのではないかと心配です。例えば人材派遣会社の良い餌食になっていたのではないかと思うことがしばしばです。

私は製薬会社に勤めましたが、そこでは一応技術者として処遇されました。それより何より、中央大学の工学部に籍を置くことが出来たことが奇跡に近いことと思います。

その中で50年以上の友達の絆に支えられたことが何よりうれしいことです。あと1年で80歳になりますが、そろそろ皆さんとお別れしなくてはならない齢となりました。先日白門化学クラブの議長を頼まれましたがこれが最後と思い、いろいろありましたがお引き受けしました。さて今日はいろいろ思い出しながら（殆ど学術に関係ないことですが）話してみたいとおもいます。

中央大学に入ってまず驚いたのは、橋本四郎先生の講義です。授業の間中ノートすることに追われました。その中で定規を使って寸分たがわぬ文章を書いた学生が居ましたね、それには驚きました。次は数学です。ショックだったのは、先生が「これを一寸見てごらん『あ〜っ分かった』という人は救われるが『はあ〜』という人は救われない、数学をやめたほうがいい」と言われました。私は「はあー」の口です。2年になると物理です。せいぜい私の頭の中は4次元ですが6次元10次元となるともう分からなくなります。そして有機化学。3年になると物理化学。もう頭がいっぱいです。

私の卒論は「穀物質の熱伝導」山田豊一先生でした。始めは大豆、次はジャガイモに移りました。一生懸命でしたが先生とのコミュニケーションがうまく行かず（当時は携帯電話もなく、コンピュータも今ほどではありません。しかもセンサーは大きく）結局普通の熱伝導になってしまったことが悔やまれてなりません。

そんな中でも楽しい事がありました。交友関係です。私は家の手伝いで生きてきました。昼は家の手伝い、夜は高校の夜学と忙しい毎日を送っておりましたが、中央大学に籍をおいてから兄が言いました。「お前は学校の事だけをやれ、家を手伝うことは禁止する」と。その頃、もう夏休みに入っていました。何かを求めて学校へ行きました。そこで出会ったのが「旅行でもしないか」と誘われたことです。その縁で50年以上続く縁に恵まれました。7人会と申します。もちろん我々のクラスは結束がよく時々集まりますが、数年前長野の川中島を、やはり数年前には吉野の桜を見ております。

製薬会社時代に唯ひとつ自慢できることがあります。上司からある設備の自動運転の話があり、私はそれに乗りました。早速それに関連したメンバーを集め討論しました。その中で「君、ドイツの技術を越えよったって無理だよ！」と言われ。闘志がわきました。しかし、それが完成したときは内心ほっとしたり、俺でもドイツの技術に勝てるんだと思っ

たりしたものです。後日、あるエンジニアリングの方が「どうしてその自動化に成功したのですか」と聞かれ、私は得意げにメンバーの討論の結果を話したことがあります。いろいろとりとめもない事を書きましたが、わが人生バラ色でした。皆さん有難う！

## 白門化学クラブ支部に在籍して

大 嶋 久 義 (第 15 回 昭和 42 年卒 八王子市在住)

私は中田研究室に在籍して卒業致しました。

在籍中はいろいろ中田常雄先生にお世話になりましたが、卒業後何の恩返しも出来ないうちに約半世紀が過ぎようとしていた平成 26 年 2 月に中田先生の訃報を知りました。

研究室在籍者として何かできないかと考えていた時、白門化学クラブ支部に在籍していたおかげで、先生の葬式・告別式の受付をおおせつかり力不足ではありましたが努めさせていただきました。

又、告別式では田中義暉先輩、林正道さんと共に遺骨の「骨あげ」の儀式に参加させていただき、すこしは恩返しのまねごとが出来たかと自分を慰めております。

平成 26 年 6 月 21 日の「中田常雄先生を偲ぶ会」(白門化学クラブ支部主催)にも出席させていただきました。このような事ができたのは、白門化学クラブ支部に在籍していたから出来たと思います。

もう一つ白門化学クラブ支部に在籍して感謝していることは、毎年開かれる総会に出席することにより総会のあとに開かれる懇親会で皆様と「校歌」・「惜別の歌」を肩を組んで歌う事です。

50 年前の青春時代に立ち返ることが出来ます。胸に何か熱いものがこみあげてまいります。白門化学クラブ支部に在籍していて本当に良かったと思う今日このごろです。



## 良き師・良き友に出会えてラッキー

林 正道(第 16 回 昭和 43 年卒 春日部市在住)

私は昭和 38 年 4 月中央大学理工学部工業化学科に入学しました。当時の大学進学率は 18% ぐらいでした。私は学力的にも経済的にもギリギリの状態でした。

私の生い立ちをお話ししますと、私の父は陸軍士官学校 49 期生で太平洋戦争末期の昭和 20 年 5 月 24 日に沖縄付近の東シナ海海上で爆撃機搭乗中、米軍に撃墜され戦死しました。ちなみに父方の祖父も母方の祖父も陸軍士官学校出の軍人で、母方の祖父は昭和 20 年 6 月沖縄で戦死しました。

昭和 20 年 8 月 15 日、当時母は満 22 才で戦争未亡人になり母の両親はいませんでした。以来 16 年間、私が県立千葉東高等学校を卒業するまで、駄菓子屋をしたり、その後公務員の職を得て私を育ててくれました。そして母は再婚しました。

普通、化学科を志望する学生は化学が好きで高校時代化学研究部に入ったりするものですが、私は母 1 人子 1 人で軟弱に育っていると思い自分を鍛えるため柔道部に入りました。(母は怪我するからと反対しました) 当時柔道部に入ってくる学生は小学校・中学校から柔道をやってきた人がほとんどでした。

1 年間投げられて、投げられて、途中で退部しようと思いましたが我慢して左の釣込み腰で初段を取ることが出来ました。

1 年浪人して中央大学に入学した時、初年度納入金は母に出してもらい、2 年度以降の授業料はアルバイトと奨学金で納めました。夏休み・冬休み・春休みにアルバイトをしましたが、当時の日給は 800 円でした。

印象に残っているのは昭和 39 年 3 月に退任された無機化学の橋本四郎先生が授業の中で話された「大学の友人は一生付き合うことになる」という言葉でした。私は化学研究部に入り友人を得て 70 才をすぎた現在も年 1 回の旅行を楽しんでいます。

化学研究部に入ったことで中田常雄先生に顔を覚えてもらい、数年後先生の紹介で出版社である東京化学同人に入社しました。

今思い返すと私は良き師・良き友に出会えてラッキーでした。

## 大学の教科書

堀中新一（第 10 回 昭和 37 年卒 蓮田市在住）

蔵書といえるほどでもない冊数であるが、思い出の詰まった本の処分には頭が痛い。その中には大学の教科書もある。履修した化学工学 4 科目（11 単位）の教科書は、ケミカルエンジニアとして仕事をする原点となったもので、本棚の目立つところに並んでいる。

川添邦太郎先生の化学工学概論（必修 4 単位）は、入門書として定評のある東京工業大学藤田重文先生の「**化学工学 I**」（岩波全書 1956 年発行 定価 320 円）である。本の体裁は B 6 版でハンデイであるが大学教科書という感じでなかった。序文には、「誰にでもわかってもらえるように」ということを念頭に執筆されたとのことで、読み返すとき一行一行からその思いが伝わってくる。会社の藤田研究室出身の先輩達からは先生のお人柄などを聞かされた。1967 年に第 2 版が発行されたが、岩波全書が絶版となる。（1963 年、オーム社より藤田・東畑両先生編集の「**化学工学 I、II、III、IV**」という全 4 冊のテキストが発行された。）

東畑研究室の化学工学実験（必修 1 単位）には、東畑平一郎先生と早大の城塚 正先生、日大の小島和夫先生との共著である「**化学工学実験**」（産業図書 1960 年 定価 280 円）が使用された。その序文には、協力者の一人として関口勲先生の名前が挙げられている。会社同期入社に城塚先生、小島先生の研究室出身がいた。化学工学全盛の時代であった。この本は初版がそのまま使われ続け、2015 年で 40 刷のロングセラーとなっている。新しい表紙カバーの著者の先生方の肩書きは名誉教授となった。現在の定価は 1,500 円である。

東畑平一郎先生の化学工学及演習一（選択必修 3 単位）には、名古屋大の井伊谷鋼一先生の「**化学工学通論**」（朝倉書店 1955 年発行 定価 480 円）が使われた。“粉粒体の粒度”から始まる本書の採用理由について、東畑先生は「機器類の写真や図表が多いこと」を挙げられた。現在、三輪茂雄先生との連名で、同じ装丁の表紙カバーで「**改定新版化学工学通論 II**」（1982 年発行 定価 3,800 円）として出版されている。

中田常雄先生の化学工学及演習二（選択必修 3 単位）では、京都大学亀井三郎先生の「**化学機械の理論と計算**」（産業図書 1949 年発行 初版の定価 1,500 円）を使用した。本書は B 5 版 624 頁という大冊で、当時の定価は 2,000 円前後したように記憶している。私は借りてすませた。中田先生は「レベルが高くかつ高価な本であるが一生使える。」と採用理由を話された。化学工学演習のテキストは他大学化学工学科に負けなかったと思っている。現在も、同じ内容で単位を SI 系に変更して「**化学機械の理論と計算（第 2 版）**」として出版されている。定価は 7,500 円である。

大型書店の化学工業・化学工学という書架に生き残っている教科書を眺めていると、1960 年代の後楽園校舎のぎしぎしとした板張りの廊下が思い出される。

## 先輩の工場を見学して

根津達郎（第15回 昭和42年卒 東京都品川区在住）

前の総会で「中央俳壇」など楽しい話を聞かせていただいた川上洋一先輩（第6回 昭和33年卒）が大田区矢口に住み中央大学に通われていたこと、いまでもそこに経営する工場が残っているということが分かりました。矢口は日本の工業技術を支えている東京城南地区の一部で、私の家から第二京浜国道を南西に6km下った隣まちで、その先は多摩川です。教職を続けた私にとって未知の世界である川上先輩のメッキ工場の見学をお願いしました。当日、工場の歴史やメッキ業界のこと、さらには健康面や叙勲の時の資料まで用意して説明してくださいましたので、その一部を抜粋し紹介させていただきます。

- ① 東亜鍍金工場のこと。 川上洋一の父勝一さんが昭和16年に創立し、昭和26年に合資会社を設立した。高校・大学ともに工場を手伝いながら通学した。現在は亜鉛メッキが主流でバレル（回転）・ラック（引っ掛け）、如何にでも対応できるように手動メッキを行っているのも特徴です。
- ② 多摩川の環境 高校1年の夏は多摩川で泳げるほどのきれいな水でした。その後工業の発展にともない汚れだし、泳ぐどころではなく悪臭もただようようになりました。環境規制と下水道の完備により昭和50年ごろから多摩川東横線付近に大量のミジンコなどが発生し現在は多量の鮎が遡上をはじめ、環境は昔に戻りつつあります。
- ③ メッキの目的 メッキはお客様の部品などを預かり表面処理し、付加価値を高めてお戻りする職業です。装飾性を高めるためには、金やクロムなどを用い鍍金厚0.2～0.5 $\mu$ で加工します。耐食性には亜鉛などを用い5～10 $\mu$ で延命効果をあげます。機能性を求めローラーやプレス金型など摩耗を防ぐためには、硬質クロムなどで5～50 $\mu$ メッキし、接点など通電性のためには錫や金などでメッキします。
- ④ 信念・使命 私たち化学屋は環境改善に貢献することが最も大切な使命だとおもいます。このことは、いただいた資料にも強調されていましたが、お話の中でも何回も強調してお話してくださいました。きっと皆様が一番言いたかったことかも知れません。
- ⑤ 健康状態 平成20年10月に胃がんのため入院し、胃の全摘・胆のう・脾臓摘出手術を受け4年間抗がん剤治療を受けた。今年、1月13日にも箱根で倒れたが、現在はすこぶる元気でゴルフを楽しみにしている。
- ⑥ 肩書・表彰歴など 茨城県大洗町に生まれ、現在は横浜に住んでいる。東京都の鍍金工業組合副理事長や鍍金公害防止協同組合の副理事長などを務め、東京都知事から優秀技能賞・産業振興功労賞など多数の表彰を受けている。平成18年には黄綬褒章を受章しました。

以上、私の一存で資料などから抜粋させていただきました。ここで改めて工場見学のお礼を申し上げます。ありがとうございます。お世話になりました。

## 千葉都民から千葉市民に変身

近藤明義（第 13 回 昭和 40 年卒 千葉市在住）



合唱団の紹介をする

2002 年春、還暦を過ぎ老後の生き方が気になりだした、接待営業での飲み会とゴルフ漬けの生活から一転、毎日が日曜日の環境に代わり、粗大ごみ・産業廃棄物にならぬ為、何か趣味を持たねばと考えていた矢先、千葉市の広報誌で「千葉市民による第九演奏会」“合唱団員募集”の記事が目に入り、第九一つマスターすれば、国技館でも大阪城ホールでも出演できると野望を持ち、即刻応募しました。当初はテノールとバスの区別も判らず、ドイツ語の楽譜を与えられ、夏から 1 2 月の本番まで 2 5 回の練習を苦心惨憺こなし、漸く周りの人並みに歌える様になりました。1 2 月の演奏会では会場一杯の聴衆を“歓喜”の渦に巻き込みました。その後、団地住民で結

成した混声合唱団『美浜混声』に誘われ歌の道が開けました。2008 年 1 月から代表を押し付けられ今日に至っております。

6 年前に千葉市音楽協会の理事になり、千葉を音楽の溢れる街にするため、プロの音楽家達と一緒に演奏会の企画・運営に汗と知恵を出し合っています。プロ演奏家の出会いと、小学校の芸術鑑賞会の実態を知り、音楽協会の会員が協力して、市内の小中学生に本物の演奏を安価に聴いてもらおうと、5 年前から“おんきょうスクールコンサート”を立ち上げ、昨年までに 40 校を超える小中学校で、テレビや CD では味わえない本物の音の迫力を体験してもらっています。



美浜混声 ステージでの演奏

33 歳から千葉在住の東京都民でしたが、60 歳からは完全に千葉市民になりました。

19 年前に心筋梗塞にかかり、医学の進歩のお陰で一命を取り留めたおまけの人生、友達の輪がドンドン広がって毎日楽しく忙しく動いております。

『美浜混声』の演奏は、You Tube に”美浜混声“として 14 曲をアップしています。ご視聴いただければ幸いです。

## 編集後記

お陰様で今回も皆様のお世話になり、無事発刊することができました。

別途、白門化学クラブ創立 40 周年の記念誌発行に向け準備を進めてまいりましたが、独立の「記念誌」としての要件には資料および原稿の量が相当量不足するという事態となりましたので、残念ながら発行を断念いたしました。これまでの収集した資料とすでに入稿いただいた原稿につきましては、本号より順次掲載させていただきます。いろいろご支援をいただきながら勝手に変更し申し訳ございません。

今回の表紙については、本号 12 頁に「先輩の工場を見学して」を掲載させていただきましたのでご高覧いただければ幸いです。

同時発行の別刷 ” 「学员時報」にみる白門化学クラブ” のまとめにつきましては、江本房利様に絶大なるご尽力をいただき、心より感謝しております。また、バックナンバーの調査については、学会事務局の皆様にお世話になりました。あわせて感謝申し上げます。

今後とも白門化学クラブの発展を祈願しつつ、少しでも協力できるよう頑張ります。皆様のさらなるご協力をお願い申し上げます。

会報担当幹事 根津達郎